



TITLE:

# 香春岳における野生ニホンザルの生態学的研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

池田, 啓; 土肥, 昭夫; 馬場, 稔; 小野, 勇一

---

CITATION:

池田, 啓 ...[et al]. 香春岳における野生ニホンザルの生態学的研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1980, 9: 47-47

ISSUE DATE:

1980-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162870>

RIGHT:

## 設定課題 2. 霊長類の運動様式に関する研究

表日光におけるニホンザルの分布と生態

小金沢正昭<sup>\*</sup>・紺野 繁幸  
(農工大・農)

冷温帯から亜高山帯に至る環境傾度のある表日光に分布するニホンザル地域個体群の季節的な垂直分布変動とその生活(特に土地利用と食性)を明らかにすることを目的とした。

調査は、標高は850 mから1750 mに至る地域に標高差150 m間隔のライントランセクトを7本設定し、フィールドサインの分布と直接観察から垂直分布の季節変動を解析し、フン内容物分析と直接観察から食性解析をおこなった。

本地域個体群の垂直分布をみると、冬季の分布域は標高800 mから1100 mの範囲にあり、夏は標高700 mから1700 mの範囲にわたることが明らかとなった。また本地域個体群の分布の地理的障害と考えられていた稜線部において、夏季、標高1785 mの志津峠をこえて、従来分布の知られていなかった戦場ヶ原側へおりていることが明らかとなった。食性についてみると、これまでに86種の食餌植物が確認された。本地域個体群の食性を他地域と比較すると、本地域に広く分布するミヤコザサを周年的に利用し、特に6・7月最も依存する点と果実食期が6月から11月と短かく、さらに初夏と秋の果実食の食物が種類の混じり合うこと、また非果実食期が樹皮・冬芽・ササの葉と暖温帯と比べると単調な点が特徴的であった。

## 香春岳における野生ニホンザルの生態学的研究

池田 啓・土肥昭夫・馬場 稔  
小野勇一(九大・理)

本年は、4・8月に調査を実施し、あわせて、これまで共同利用研究でおこなってきた継続調査のとりまとめをおこなった。

この群れは、1974年に半数が捕獲され、40頭あまりの個体数のまま現在に至っている。捕獲前の個体数は90—100頭で、行動域は4.7 km<sup>2</sup>(密度、21.7/km<sup>2</sup>)であった。捕獲後は30—40頭が3.1 km<sup>2</sup>の行動域を占め、11.5/km<sup>2</sup>と低い密度となっている。捕獲後の行動域は、前のそれに比べ60%程度狭くはなっているが、自然林、その他餌となりうる植物の豊富な位置を占めている。一雌当りの出生率は、捕獲後0.77—0.88と前の0.32—0.64よりかなり高いものとなっている。この様な条件のもとで、1974年から1977年までに群れの総個体数は、増加していない。

成熟雌の数は捕獲後ずっと横ばいを続け、1975年に10頭になったが、それ以外の年は8頭のままであり、雌の総個体数に対する比率は、0.27と1972年の0.34、1973年の0.80よりいくぶん低いか変わらないように思われる。したがって、高い出生率がただちに群れの増加に結びついておらず、群れ全体の出生率をみた場合、捕獲前・後で顕著な差はみられない。この成熟雌の増加がみられない要因としては新生児の出生が直ちに雌の増加にはつながらないことである。即ち、捕獲時(3月)に1才、新生児であった個体と捕獲の年に生まれた個体が群れ総数に占める割合が低く、1975年から1977年まで毎年1割以下でしかなかったことが挙げられる。1975年の新生児からはこの傾向は現われておらず、捕獲の影響がうかがわれる。また、1975年、1976年の新生児について、1才から2才までの期間の消失率(死亡率)がいくぶん高い傾向がみられており、高出生率がそのまま個体数増加に結びつくか疑問が残る。

行動域の利用方法にも、捕獲前・後で著しい変化が認められているので、今後、さらに詳しい検討を加える予定である。

\*現在の所属：(財)日本野生生物研究センター